



パープル

第49号

高村昌憲個人誌

高村昌憲・個人誌 « *Takamura Masanori · Kojin-shi* »

詩

堀を越せる人へ 高村 昌憲

翻訳詩

アラン『ガブリエル詩集』（十六） 高村 昌憲 訳

メーヌ地方の森から

秋の頃

一年

繊細な抒情詩

評論

初期プロポ断想（三十二） 高村 昌憲

- 1 四月には薄着をするな
- 2 宗教的体験
- 3 偉大な副王は腹を出して
- 4 ドレフュス事件とそれらの主張

編集後記

表紙の写真はラベンダーの花々（山梨県河口湖の八木崎公園にて）

音楽家には音楽が楽しいのだ
それは試みる行為であるから
幾何学者は幾何学が楽しいのだ
それは思考する行為であるから

競技者には競技が楽しいのだ
それは勝利の夢を見れるから
吝嗇家は吝嗇すると楽しいのだ
それは幸福な気分になれるから

勇気のある人は勇気が楽しいのだ
それは矜持ある実例に満ちるから
堀を越そうと思う人も楽しいのだ
越す前から自分を確信できるから

自分自身の企てを疑っている人で
恐れているものが三つあると言う
他人と外部の必然性と自分自身で
先ずは自分自身を確信せよと言う

堀を越えようとして越せることを
疑う人はそれだけで落下するのだ
誓ったり決心するものが無い人を
幸福と平和へ導く橋は皆無なのだ



银山温泉（山形県尾花沢市）

メーヌ地方の森から

おゝ湖よ！ もしも思考に何らかの力があつたなら
私は 日が暮れる時には湖岸にいるだろう
星たちが瞬いているのをあなたが見る時間に
ヴェールを引き裂いている優しいヴィーナスは
小枝を突き刺している真珠の身によって
動物のような液体の長い渦を濁らせている
霧が立ちこめて暑い時間の猛獣のような雲は
対照的に薄紫色した透明さを厚くしている
大きく開けたあなたの両眼には夕方の宝物
もしもその時ふいに現れた茂みの夢が
小道の間で彷徨う恋人たちのようであつたなら
殆どそれらを待つ肉体に触れるまで
ぼんやりしたイメージを絡み合わせて作っていただろう
もしも曲がった虹の欲望がゆるんで
それ自らに反射した矢を感じていたなら
もしもその空しい泉の苦しみが溺れていたなら
もしもあふれる程の愛が大洋のように
虚無に逃げる長い溜息の代りに
永遠の波になって此岸から彼岸へ流れていたなら
そうだ 夕方の火の中や波の姿の中に
眼に見えないもので不安になっている行列を探して
光輝く惑星の下で影を突き刺して
多分輝やいているあなたの両眼を私は見るだろう
そして私の感じ易い波紋に震えているのはあなた自身
あなたは大きな森の半円形の丸天井の下で
私に似ている森の中の一人の人間として見ることになるだろう

秋の頃

大地は雲でできた外套を着ていた
その上には振りほどかれた縁飾りの断片が漂っていた
太陽は地平線の下の方へ沈んでいる
おゝ 暖炉と燃えさしのクリスマスの季節よ来い
長い日の明かりは既に去っていた
そして月が髪を乱したように走っている夕べ
おゝ 燃える私の夏よ あなたの噛み傷が沢山ある
私はあなたの厳しい明晰さを決して後悔せず
乱暴な亡霊をそんなにもきれいに描くこともなく
あなたの眠りはそんなにも短くなく 目覚めも早くなく
おゝ 彫られた裸の神よ あなたの爪は嘲笑的で
顔の皺と心の中の皺よ！
大理石の姿に代って純粋な光線を守れ

物思いに耽り 日が短くなった日々の夕べに
私が失った時間で一番美しい思い出を集めながら
既に十月の赤褐色の葉は樹木の下に座っている

霧はぼんやりとした広がりの中で 私たちの魂が
拒む運命の支配する部分を溺れさせている
既に周囲を眠らせている寒そうな森の
曲がりくねった淡い線と厳かな丘を見よ
水蒸気のテーブルクロスが谷に広がる
風に飛ぶスカーフを通してヴィーナスが笑う……

かくして静謐で神秘的な水平線の上に
私は二つの星が昇るのを見るだろう

あなたの両眼だ

(ガブリエルへ 一九三〇年九月一〇日)

おゝ優しい秋よ！ 金色と真紅の混淆
あなたはヴェールを被った霧の中で光輝を生み
あなたの魂は何本もの小川のせせらぎのように眩く
夢見るあなたは美しい自分の姿を水に映して見る
夏の栄光は墓穴に向って再び降下して
一枚の葉が落ちるように一日一日が短くなる

.....

あなたが出発する時は春に向って昇っていった日
あなたは涙のプリズムを通して更にぼんやりしている
金粉と深遠な大空と輝いている幻影よ！
その悲しみが時々奇妙な魅力を放っている
それは魅惑し そして悪が殆ど善良になる
あなたは少なくとも不幸には誠実になる約束をした
危険な矢が突進するようなあなたは美しい
時間と空間を陶酔させているあなたは野性的だ
旅立ちという辛い衝撃があつてからの自由
しかし結局矢というものは何らかの処に入り込むのだ

残酷な夏の後には涙の秋が来た
どんな楽しみも狂ったように鳴る警報が付き
そして沢山の絶望と役に立たない歌が付いており
その時 斜めに傾いている夕日の光の下で
私たちの木立が黄色くなり 苦しみも穏やかになって
歌はより甘美になって愛らしい旋律が流れていた

回りのものが全て泣く時は泣くのが気持ちよい
霧は物の輪郭を濡れさせたように見える
厳しい横顔と大変に引締まった体の輪郭は何処？
全てが溶けて大地は芽ばえのために柔らかくなる
あなたは思いを凝らせ そして甘美な悪を宿せ

動物的な思い上がりの感情の動きを眠らせろ
瞑想してあなたを傷つけたものが分かるようになれ
哀れな魂よ 隠された思考を育てていけ

もしもあなたが自分しか愛さないのなら 何も愛していない
だから金色の頭の動きが大変遠くから
崇められた苦しみから息子たちを引き出すようにさせて
この痛々しい関係を感じながら考えてくれ
その苦しみは大変にあなたの近くにあつて悪を生む
それはあなた自身で 宿命に戻ることで
しっかり結びついたあなたのものがその姿でなければならず
同時にあなたは傷付けられた自分を知らねばならない

そんな風に心の神秘に従って
眠りに苦しむ私は幸福の金色になった

冬になってこれらに雪が積もる時
私は新しい薔薇の希望を知った
私の悲しい花束には緑色の葉が輝いていた
草や柏や鳥が皆お互いに愛した時
窪地の草が秘密の褥を作る時
口づけが全宇宙を知る口を溺れさせる時
沈黙のその時間に眠る者は蒼ざめている

ベッドのように暖かく恋人の影のなか
銀色の月は白い色調をひき立てていた
ナイチンゲールのあなたは枝の下で歌を響かせていた

(ボストンのガブリエルへ 一九三〇年一〇月二八日)

繊細な抒情詩

暖かな昼間に良い香りを放っている
ティーローズの色の時にあなたは私に強い関心を寄せた
夏の畑の溝をうろつきながら私に与えていた
金色の愛撫をあなたは遠ざけることができた

おゝ余りに速く あなたが赤毛の睫毛を通して見るのは
雲がまばらに漂う遙かな大空の彼方よ！
大変に優しいあなたの微笑も既に遠くへ去り
前兆がかすめる頑なに額の上を乗り越えていた！

ミルクと血と不可思議な火を手に入れろ
あなたは美しい炎のように私の上に体をねじ曲げ
そしてあなたの魂を映し出していた
移り気の時間の恐るべき遊びに私は微笑していた

風に弄ばれる炎よ！ 風よ！ 金色の閃光のように
太陽の娘は別世界を明るく照らしている
そして崇められた拷問が続く長い夜に
私が探している人は腕を広げて 抱いて取り戻す
あなたは新しい魂にびっくりして微笑する

貪欲にこの優しさが続くことに身を投じて
あなたはもっと大切な人生を予感している
恰もあなたは私のものの中に幸福を認めたように
私の思考の中にもあなたがいることに気付いていた

(ガブリエルへ 一九三〇年一〇月三〇日)

1 四月には薄着をするな

世界地図をご覧になればお分かりになると思いますが、東京はほぼ北緯三五度に位置しており、スペインがあるイベリア半島の南端付近と同じです。パリはほぼ北緯四八度に位置していますから、北海道の北端よりも更に北に位置しています。このことは四月になっても、フランスが北極からの寒気の影響を受けやすい理由の一つと思われます。何世紀も昔からフランス人が「四月には薄着をするな」と言って来たのも庶民の知恵である、とアランは一九〇八年六月十日のプロポで書いています。

「毎年私たちは、太陽が高く戻って来て、再び暖かくなるのを望みます。ところが日が長くなる時は、私たちの家ではまさに刺すような寒さです。そして三月二十日頃に、昼が夜の長さと同じになる時、コー地方の台地に何故冷え切った微風が吹き、河岸にも連続して降下して来てサン＝スヴェの蒸気を一掃させるのか、私たちには分かりません。

しかしながら、大地がゆっくりと冷たくなったり暖かくなったりするのを理解するのは容易です。大地と、それよりも沢山あるのが水です。そして、水の温度を一度上げるには、大地を一度上げる熱の原子量が少なくとも三十倍なければなりません。それ故に太陽光線が春になっても、地球上の春は遅いです。」

コー地方はフランス北西部にあり、サン＝スヴェはフランス南西部の町です。四月になればサン＝スヴェの町は暖かくなって蒸気が発生して上昇します。そして、その地表近くに北極からの寒気が這入って来ます。地理的には北方にあるコー地方に「冷え切った微風」が吹く原因になっている、とその後でアランは説明します。天候というものは日々変化しますが、地球規模で見るとかなり正確に把握出来るようです。従って、四月になっても庶民が生活する地表は、冬の時のように寒い儘です。「四月には薄着をするな」と言われて、何世紀もの間守られて生き続けて来た庶民の知恵にアランは感心します。

ところが他方で、素直に生活の知恵とは思えない所謂〈迷信〉というものもあります。例えば「ウナギと梅干し」は食べ合わせで、一緒に食べると中毒を起こすから食べてはいけないと言われていました。しかし、最近初めて知りましたが、科学的には決してそういうことは無いとのことでした。恐らく、脂っこいウナギを食べると、口直しに梅干しも沢山食べて仕舞うので、食べ合わせとして梅干しの消費を抑えたのではないかとされているようです。あるいは子供の頃に、下の歯が抜けたら屋根に乗せれば早く新しい歯が出て来ると言われて、抜けた乳歯を実際に屋根へ投げたことを思い出しました。これなどは何の根拠も無い迷信でしょうが、子供の身になれば大人の言うことを信じるものですから、真剣でした。

しかし大人になっても、子供の時のように信じていることが多くあるように思えてなりません。「人よりも沢山勉強して、出世して有名になる」ことが正しいことと信じている大人は、沢山

いると思います。確かに、沢山勉強することは良いことであり、出世することや有名になることも良いことに違いありません。しかしながら、勉強することと、自ら思考したり感じたりすることは、全くの別ものであることに気付いている人は意外と少ないように思います。勉強することとは、主として他人が思考したり感じたものの〈伝承〉に過ぎません。「伝承は肉体には為になって良いものですが、精神には悪いものです。伝承はその儘で〈歴史〉に従って行動しますが、〈理性〉に従って思考しなければなりません」と書いてアランはこのプロポを結んでいます。

従って、〈沢山勉強する〉人は、少しも自ら思考しないで感じない人かもしれないのです。「何も考えない人は何も感じません」と『思想と年齢』の「疲労について」の中でアランは言っています。〈出世して有名になる〉ことも、正しいことで立派なことではなく、必ずしも幸福ではないかもしれないのです。東京都の榊添前知事のように、出世して有名になっても、正しく立派でない場合もあり、決して幸福でない事例には枚挙に遑ないと思います。

つまり子供の時の真実は、大人になれば違って来るといことです。「四月には薄着をするな」という殆ど変わる事のない伝承の真実によって、風邪をひかないのは肉体のために良くて、〈精神には悪い〉とアランは言います。何故なら伝承は、自然と同じ様に一人ひとりの人間の思考と感性を受け入れないからです。自然は平等ですが、人間の言葉も理解しません。翻って言葉は人を欺きますが、自然は欺きません。もしも人間の思考と感性によって言葉も人を欺かなくなれば、その時は真実の言葉になって、人間の理性を育むことになる良いものになるのでしょうか。(完)

2 宗教的体験

詩人中原中也は次の様なことを言っています。「この世に神はいないと信じるなら、いないということを証明しなければならないが、いないというその証明そのものが神のことではないだろうか。従って神はいるに違いない」という意味のことを中也は推論しています。一般的に神は眼に見えないのですから、その見えないものを存在していると証明することは、謂わば科学的に認識しなければなりません。その証明を検証し吟味するためには、知覚と理性が必要でもあります。つまり人間の経験に頼り、その科学的な認識を当てにすることになります。神という宗教は、経験という科学と結合することになり、宗教は科学に似ていることになります。一九〇八年六月十一日のプロポは次の様に始まっています。

「私（アラン）は最近、〈宗教的体験〉についての話を聞きました。この対義結合には既に色々な意味が含まれています。それは〈宗教〉と〈科学〉が似ていることを示していますし、〈科学〉は街灯の大きな明かりを消し、〈宗教〉は豆ランプの明かりを灯します。従って、〈科学〉が歴史の中で見えなくなっている間、〈宗教〉は積極的な方法で白日の下に〈神〉を試します」。

歴史上で現代程、〈科学〉という街灯が明るく灯している時代はないと思います。しかし〈宗教〉の明かりも、豆電球でありながらも灯っています。この世には理解出来ないことが幾らでもあり、不可解なことは枚挙に遑ありません。人間の肉声が届かない遙か遠くにいても、無線電信と電話機は確実に肉声を届けてくれます。古代人から見れば、まさに奇跡です。同様に百年程前には不治の病と言われた結核も、現代医学はこれを完治させてくれます。当時の人々から見れば、これもまさに奇跡です。〈科学〉という街灯が消えれば、電話機や結核を治す薬は奇跡であり、〈神〉を見るに違いありません。奇跡は宗教を生みます。イエス・キリストの奇跡はキリスト教を生みました。預言者ムハンマドの奇跡はイスラーム教を生みました。

「無線電信によって、私たちの〈神〉は黒人の〈神〉よりも真実であると示すことが出来ます。ところで、この奇跡は何でもないことが私たちには全て分かっていることなので、タンブラーから小球を出す手品のように〈神〉を証明することは断念せざるを得ません」とアランは書きます。こうして、〈科学〉が歴史の中から見えなくなって来ると、「〈神〉を証明することは断念せざるを得ません」とアランは理解します。つまりそれは、宗教が生まれる時でもあります。但し、それは万人が理解出来るようなものではありません。それは決して知識だけで可能になるのではなく、自らの経験だけによって感受し取得されるものでもあります。神の存在を体験するのですから、そのことを他人に証明することは不可能であり、断念せざるを得ません。その様な宗教的体験をした或る信者たちについて、アランは次の様に報告していますので、少し長いですが引用します。

「或る人（信者）が私たちに次のように言いました、「私は不幸だった。人生の悪に耐える勇気が私にはなかった。日々の労働は私には退屈で無駄なように思えた。人間たちの悪意と不正義が私の心を押しつぶした。私はもう生きたくないと感じた。その時、良き司祭の忠告に従って、信

仰と祈りと聖典を読んで瞑想する道に這入った。それ故、数日後に自我の中に奇跡が起きた。突然に、自我の中に〈神〉の存在を理解し、同時に何時までも変わらない喜びがしみ込んだ。私は恩寵を感じた。それは本当だ」

よろしい、それは本当です。そして、私（アラン）はそのことを直接見た訳ではありませんが、本当だったと十分に認めたいと思います。だが、何を証明するのですか。はっきりしていることは、信じることは良いことであると証明することです。この信仰が何ものかに繋がっていることは、何も証明していません。病人の病気は軽くなり、パン脣の丸薬で治るようになります。そのことは信仰が胃や腸に効くことを示していますが、丸薬の中にパン脣以外のものがあったとしても全然証明されていません。そして最後には、幸せに違いない酔っ払いやモルヒネ中毒患者に出会うこととなります。それは何を証明していることになるのでしょうか」。

以上の様を書いてアランはこのプロポを終えています。アランは決してキリスト教を否定する無神論者ではありませんが、宗教が〈幸せに違いない酔っ払いやモルヒネ中毒患者〉を生んでいる危険も指摘しています。それは神の存在を信じることにより、確かにパン脣だけで出来た丸薬で病気が治るかもしれません。確かに〈信仰が胃や腸に効くこと〉になり、幸せになることもあります。しかし、その様な宗教的体験には神の存在を信じない精神である、科学的な思考と自己を客観的に見る理性が欠如しています。神の存在を信じない精神も又、中也が言うように神であるかもしれないのです。

いずれにしても宗教的体験には、奇跡によって神の存在を信じることは必要でしょうが、奇跡を冷静に思考出来る精神を所有することと同時に、神の存在を信じないことも現代社会の宗教には必要のように思えます。何故なら、酔っ払いやモルヒネ患者は本人自らは幸せかもしれませんが、家族を含めた社会にとっては幸福なことではないからです。そして限定された社会における独善的な幸せばかりでは、決して社会にとっての真の幸福に繋がらないでしょう。そう言う意味で人間の真の幸福は、宗教団体にも政治団体にも無いように私には思えます。何故なら、組織や団体に依存する人間の数が増えれば増える程、その組織や団体にとっての〈幸せに違いない酔っ払いやモルヒネ患者〉も増加するに違いなく、既に至る所で知覚出来るからです。（完）

3 偉大な副王は腹を出して

人間が実際に感じる痛みは、他人に話しても決して理解されません。その話を聞く人にとっての痛みは、抽象的な観念でしかありません。隔靴搔痒（かつかさうよう）の思いが強くなるばかりです。「せいぜい芝居を見ているように心を動かされるだけです。如何なる言葉もその苦しみを表せません」とアランは一九〇八年六月十四日のプロポで書いていますが、その例としてガレー船のことについて触れています。

大勢の人力で海水を櫂で漕ぐガレー船は、風力で航行する帆船よりも長距離航海には不向きであったようですが、その代わりに小回りが利いたので、戦闘には向いていました。ガレー船の漕ぎ手は、中世の頃のヴェネチア辺りでは人気のある職業でした。それはガレー船を漕いで行った先で、個人的に交易活動が可能であり、給金以上の利益が期待出来たことが大きな理由でした。しかし苛酷な労働であったために、やがて十七世紀頃から、取分けフランスにおいては囚人や捕虜たちが体刑代わりに漕ぎ手として利用されました。逃亡を防ぐために足は鎖に繋がれ、過労などで死ぬまで強制的に漕がされました。死ねば次の囚人が補充されました。こうしてガレー船の暗いイメージが出来上がって行ったと言えます。

「男たちはガレー船を漕ぐ刑に服しました。そのことはあなたをびっくりさせます。如何にして彼らはそれに耐えたのでしょうか。最早簡単なことは一つもありません。彼らは腰掛に繋がれて、数か月後にそこで死にました。肌は裂け、骨が露出していました。次に別の者が繋がれて、同じ様に死にました。最も臆病な者がこの様にして死にます。最も勇気ある者もこの様にして死にます。苦痛は私たちとは関係なく構わずに増大して行きます。人間は動物になって耐えることになります」

ガレー船を漕ぐ囚人たちには希望がありませんでした。苛酷な労働を毎日同じ様に継続して行うのですから、苦しみしかありません。同じことの繰返しは絶望しかありません。向上も発展も無いからです。「英雄とは、自ら進んで苦悩に身をさらす人のことです」が、身をさらす瞬間には苦悩や絶望を感じないようにもなります。

「そして苦悩を感じても、最早逆戻りも出来ません。そんな時の英雄は苦しみ泣き叫ぶ哀れなもので、苦しみ泣き叫ぶガレー船を漕ぐ囚人のようです。偉大なる副王は腹を出して、傷付いた動物の顔になって、その苦痛から彼は少なくとも英雄の軽率さに後悔する時間を与えなかつただろうと思います」とアランは書きます。英雄が行動する時は後先のことを考えません。行動せずに止まって考え、過去を思い出す時に後悔する感情が起こるのです。〈貧乏暇無し〉という俚諺は理に適っているように思います。考える暇が無ければ絶望しないで済むからです。

英雄も人間ですから、希望が無くなればガレー船の囚人と同じ様になります。幾ら苛酷な労働であっても、寄港先で個人的に自由に交易を行えば、〈苦しみ泣き叫ぶ哀れなもの〉に成ることはありません。逆に、ガレー船の漕ぎ手は人気のある職業にもなり得たのです。生きて行く上で必要な労働を職業と定義するなら、ここには職業としてのヒントがあるように思います。

つまり職業には生きて行くための希望が必要です。眼に見える成果が必要です。給金という成果が必要です。あるいは事業の完成という成果が必要です。シシュフォスの様に、永遠に山頂へ

石を上げ続けるだけの行為に希望は見付きません。死ぬまで永遠に漕ぎ続けるガレー船の囚人にも希望は見付きません。しかし、漕ぎ続けながら話をして、それを書き続けることが出来たなら、状況は違って来るに違いありません。言葉には不思議な力があります。書き留めることによって言葉が言葉でなくなります。あるいは文字が無かったとしても、『平家物語』を語る琵琶法師のように、記憶として覚えて置くことによって言葉が言葉でなくなります。話す言葉は消えて行くだけですが、文字にしたり記憶に刻んで置くことで、言葉が消えなくなります。言葉の蓄積が可能になり、成果が生まれます。事業が可能になります。ガレー船の囚人もシシュフォスも、話をした言葉が蓄積されて行ったならば、刑罰が職業としての労働に変わり、希望が生まれて来るに違いありません。

詩人が詩を書く理由もここにあるように思います。我が国の現代詩人たちは、詩を書いても殆どが報酬という給金が無いのですが、それでも成果の蓄積は確実にあります。従って、給金が無くても希望は確実にありますから、詩人がいなくなることはないと思います。詩人は、給金無くとも職業になり得る不可思議な人種です。小説家も画家も同じです。彼らの行為には、給金が無いとしても、成果があり、事業があり、希望があります。

戦場にいる兵士たちも同じです。戦勝という成果と事業がありますが、話をして蓄積されれば更に一層大きな希望になるに違いありません。

「私（アラン）は戦争のことを話す死者たちの言葉を聞きたいと思います」と書いてアランはこのプロポを終えています。因みに、アランは第一次世界大戦の戦場においても毎日のように執筆し、ランブラン夫人の元へ郵送して多くの作品を残しました。恐怖と絶望に苛まれる戦場にあっても、まさに言葉の蓄積がある限り、希望を失うことはなかったのだと思います。（完）

4 ドレフュス事件とそれらの主張

ユダヤ人の陸軍大尉アルフレッド・ドレフュスが、機密情報をドイツへ流したというスパイ容疑で逮捕されたのは、一八九四年十月でした。同年十二月に、パリ軍法会議はドレフュスに終身流刑の判決を下し、翌年四月に彼は仏領ギアナの悪魔島に収監されました。その後、冤罪事件としてフランス社会を二分する大論争になったのは周知のとおりです。

破棄院から再審を命じられた軍法会議は、一八九九年九月に再度有罪判決を下しましたが、大統領令で特赦になるという苦肉の策が弄されたようです。そして一九〇六年七月に、破棄院は軍法会議判決を破棄してドレフュスに無罪判定を行い、彼の名誉がやっと回復されました。この冤罪事件を契機にして、フランス国内では神とは何か、国家とは何か、民主主義とは何か、正義とは何か、自由とは何か等々の問題が盛んに議論されましたが、現代の成熟したフランス社会の基礎を作り出したように思います。少なくとも一七八九年のフランス革命だけでは説明出来ないだろうと考えます。事実、大革命後のフランス近・現代史は王政と共和政の繰返しの歴史であり、やっとフランス社会は現代の第五共和政に落ち着いたと言えます。我が国の場合をこの様な王政と共和政の観点から見てみると、江戸幕府以後の極めて長い王政が一九四五年の敗戦と共に実質的に終焉して、やっと第一共和政の時代になったと言えるのかもしれませんが。勿論、現代の我が国は最早王政への逆行の道を許容出来る社会ではない筈ですが、近年は〈リーダーシップ〉を吹聴する発言が余りに目立って来たため、思想の潮流としては王政の精神が些か色濃くなって来ている気がしないでもありません。

いずれにしても、アランが一九〇八年六月二三日のプロボを書いた時は、ドレフュスに未だ無罪判定が出ていない時代であり、フランス社会の基本理念が議論されている時代でした。所謂王政派とも言える君主制擁護者たちの意見を、アランは次の様に語っています。

「彼（ドレフュス）は有罪だった。しかし、我々（君主制擁護者たち）はそれを証明出来なかった。それは国家の一大事で、全てのドアを閉めて権限のある国家権力によって、最高の権威をもって取り扱わなければならなかった。この手続きを受け入れたくなかった者たちは、国民の敵である。彼らは〈祖国〉の安全が最高法規であることを忘れている」

これに対して共和政派とも言える民主主義者の意見を、同じくアランは次の様に語っています。

「国家権力による全ての行為は、白日の下で、点検出来るやり方で行われなければなりません。あなた方（君主制擁護者たち）は或る男を告発します。その男の証拠を握っていますが、示すことが出来ないとあなた方は言います。まあ、あなた方は中傷家なのであり、その男は無罪です。かくして私たちは無罪と中傷を明白にします。法的に事実になり得ないものは、全てが無効です。法律のこの規定を認めたくない者たちは、国民の敵です。個人の安全が最高法規であることを忘れているのです」

最高法規は〈祖国〉の安全でしょうか。それとも個人の安全でしょうか。勿論、この問題は二者択一出来るものではありません。何故なら国の安全が確保されなければ、その中で生活する個人の安全も確立されないからです。しかしドレフュス事件のように、個人の安全が確保されない

場合があっても、国の安全のためにはやむを得ないとする考え方に民主主義者たちは我慢がならないのです。国の安全が優先される考え方とは、まるで蜜蜂の巣のように同じ形の巣が出来て行くばかりです。同じ形状の考え方が確立されて行くばかりです。そこには真の自由と正義が無い、とアランは主張します。

正しい考え方とは、必ず個人が思考したものの中にあります。何故なら、思考は個人のものであるからです。自分で知覚して思考しなければ、正しい考え方は生まれません。思考しない者は感じることも出来ない、とアランは言っていますが、まさにそこには思考の奥義があると思います。言葉だけを丸暗記しても、そこには思考が欠如していますから、〈仏作って魂入れず〉の事態が発生します。それでは到底正しい考え方になりません。従って個人の安全が優先されない処に、正しい考え方は生まれませんでしょう。新興宗教団体や政治団体が良くやるように、組織の拡大を目的に作成されたマニュアルを信者や会員に幾ら唱えさせたり覚えさせたりしても、そこには〈魂入れず〉の人間ばかりが増えて行き、人間の数や多数決ばかりが当てにされます。多数決と、真の自由と正義つまり正しい考え方とは、殆ど関係が無いと理解すべきだと思います。何故なら正しい意見は、何時の時代も最初は少数意見であったからです。ここに少数意見を大事にしなければならない所以があります。従って自らの思考に基づかないで、批判精神も無く短絡的に多数決を当てにする者たちには真の自由と正義が無いと言っても過言ではありませんから、少数意見を無視する精神の傾向が強くなります。所属する団体への帰属意識に基づいた勝者の幻想のみに支配されていますから、生命への充実感と充足感を喪失した人間ばかりが、平板な蜜蜂の巣のように増大して行きます。これでは他者を刺して傷付けながら、自らも死んで行く蜜蜂のような人間になるばかりです。君主制擁護者たちは〈人生の価値あるものを放棄している〉のであり、〈精神の眠り〉から目覚めよ、とアランは言っています。（完）

◆五月二十七日（日）にブックログのパブーの電子書籍として、アラン著『家族感情』（高村昌憲訳）〈<http://p.booklog.jp/book/106909/read>〉を登録した。本書はA4用紙に印刷しても二十五ページ程度の随想録である。「序」「一 男女」「二 母と子」「三 父親」「四 家族」及び「訳者あとがき」からなる。アラン自身が「序」の中で「社会が家族によって構成されているのであって個人によって構成されているではありません」と言っているように、家族は個人主義に基づいて論述すべき対象ではない様である。勿論、〈人間性〉が家族の中でも重要な役割を果たしているが、父親には父親の人間性があり、母親にも母親の人間性があり、子供にも子供の人間性がある処が重要であり、正しく判断しなければならない筈である。そこからは決して個人主義へ逃亡する訳にはいかないのである。アランも本書で言っている様に、〈家族〉と〈祖国〉と〈人間性〉は一連の継続した発展が許されていないのである。従って家族を思う愛と祖国を思う愛は、各々が異質の愛と見做す必要がある。同様に、人間性も多角的に捉える必要があり、家族には偉人がいないという観念も十分に考えられることである。しかし、それらの多様な観念を架橋させ統合させる場所があるとするなら、そこは〈学校〉であるとアランは言っている。家族感情が健全な成長を遂げる場所でもある。アランを真に理解するには、アランの全てを知る必要があると思い、その略歴を「訳者あとがき」の中で簡単に記載したので、参照して戴きたい。いずれにしてもアランの書いたものは読めば読む程、味わい深くなる不思議な文章である。なお、パブーの電子書籍に登録する際に、本邦初訳と思われる作品は本作品以外のものも無料で検索出来る様にしてある。パソコンやタブレットなどでお気軽にお読み戴きたい。又、「風狂の会」が編集する電子書籍の同人誌「風狂」も、パブーの「電子書籍作成・販売プラットフォーム」〈<http://p.booklog.jp/>〉から無料で検索出来るので、こちらの方もご一読戴きたい。

◆八月七日（日）に東京・吉祥寺の「永谷SPACE」で開催された「風狂の会」（北岡善寿氏主宰）の講演会「能面について」（講師・神宮清志氏）に出席した。長年、能面を制作してきた神宮氏の話は能鑑賞の側面に止まらないで、創作者としての興味深い内容であった。例えば古典的な能面を制作する上で、〈型〉があるとのことである。実際に図面も見せて頂いたが、古典が古典である所以でもある。ところが神宮氏は古典の能面ばかりでなく、ジャンヌ・ダルクやイエス・キリストなどの面も作るという。勿論、この時には〈小面〉、〈翁〉、〈般若〉のような〈型〉は無い。神宮氏独自の面が出来上がるのである。つまり面にも古典作品と現代作品がある点で、芸術の古くて新しい問題が再確認出来て興味深かったのである。考えてみれば古典も現代も単に時間的な相違があるだけでなく、人間の思想における本質的なものが内包されている様に思える。古典作品においては同一のものを創ろうとしても異質なものが現れて来ることが多い。これに反して、現代作品においては独自のものを創ろうとしても、その独自性が古典作品よりも稀薄に見えて来ることが多いのである。この問題は恐らく神宮氏も自覚されているに違いない

。能面作りに〈難しい技術は無く、地味に、まじめに、確実に、ひたすら肉体労働に励むだけ〉であると神宮氏は言うが、やはり芸術作品は作者が思い描いた設計通りに出来ない処が面白いのだと思う。そのためには真剣に精神を集中して制作する必要があるが、この点は遊戯との相違点でもある。如何なる芸術も遊び半分では充実したものは出来無いであろう。又、心から面白くもないだろうし、真の完成も体験出来ないだろうと思う。当日は、講演後の質疑応答で「能面作りの面白さは何ですか？」と神宮氏へ質問しようと思っていたが、実際に氏が制作した能面を直接手にとって観た時に、その様な質問は愚問と思い、只管沈黙するしかなかったのである。神宮氏の人となりを知りたい人は、同人誌「風狂」を是非ともお勧めする。能面作り同様に、こつこつと粘り強く書き溜めた散文作品も魅力的である。

◆九月八日（木）に中村不二夫著『辻井喬論』（土曜美術社出版販売）を読了した。辻井喬は詩人であり小説家であるが、一般には西武百貨店や西友などを含むセゾングループ代表としての堤清二（本名）の方が高名かも知れない。本書は文学者としての辻井喬を論究することを企図しているが、やはり実業家としての堤清二との対照から、より一層鮮明な辻井喬像を浮かび上がらせている。文学者と実業家という一見すると二律背反する両者を、綿密な資料に基づいて架橋させて行く処に本書の醍醐味がある。中村不二夫氏の言葉を借りて言うなら、アウフヘーベン（止揚）によって人間性を発展させた処に辻井喬の偉大さがあるのだろう。中村氏が、二律背反したその精神性を直観した慧眼にも端倪すべからざるものを感じたが、それは又或る意味で生前の辻井喬との実際の交流が触媒になっていた様でもある。人物を理解するには、本人の著作を読むだけでは不十分な面もあり、実際の出会いを通して、例えば本に署名して貰ったり詩の一節を書いて貰ったりすることは、理屈抜きで敬意を抱き興味を持った人物が醸し出す人間性の理解に役立つものだろうと思う。就中、その行為に偶像化や流行性への嗜好を強調する必要は全く無いのである。尊敬する好きな人が書いたものは良く理解出来るが、好きでもない人が書いたものは荒唐無稽に感じることが多い。その点で本書には、中村氏の辻井喬への愛情と敬意が至る所で発見出来て爽快感すら覚えたが、読了後に臃気ながらも不満な気持ちも残った。換言するなら、二〇一三年十一月二十五日に辻井喬が亡くなるまでの営為に、〈メルティングポットからサラダボールへ〉の移行についての考察も無視出来ない様に思えたのである。ポスト・モダン後の社会においては、メルティングポット（坩堝）の中の金属の様に単一の巨大集団や国家を志向する器から、色々な味の野菜を入れるサラダボールの様な多様性を認める器としての社会への移行を志向する考え方がある。勿論、その中身にはマイノリティー（少数派）を認めることを含み、正しい意見とは何時の時代でも最初はマイノリティーであった。ここにマイノリティーを尊重しなければならない所以がある。辻井喬の場合も、二律背反を架橋させる処世の外に、外部の多様性と共に自らの精神の固有性を独自の方法で体現させて発展させた稀有な人物であった様にも感じている。

◆「パール」第五〇号は、二〇一七年五月一日に登録予定である。

高村昌憲個人誌 パープル (第49号)

2016年11月登録

<http://p.booklog.jp/book/110341>

著者：高村昌憲

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/110341>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/110341>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ